

水 芦 光 子

みだれ 扇

三 笠 書 房

水
芦
光
子

みだれ
扇

三
笠
書
房



みだれ扇

検印省略

定価 四八〇円

昭和四五年 五月三〇日 第一版第一刷発行

著者 水芦光子

発行者 竹内静江

発行所 三笠書房

東京都新宿区戸山町三五
電話 東京(二〇三)七七八一
振替 東京二二〇九六

印刷 信濃印刷／製本 端野製本

© Mitsuko Mizuashi Printed in Japan 1970 [0093-001006-8936]

乱丁、落丁のものは本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

目次

第一章	五
第二章	四七
第三章	六九
第四章	九三
第五章	一四二
第六章	一五七
あとがき	二〇一

装
幀

木
村

孝

みだれ扇

第一章

除夜の鐘が鳴り出した時、並木俊介は、二階の自室の窓をあけ放して、真夜中の町を眺めていた。寺はかなり近くにあるらしく、鐘の音がおもしろく迫力のあるひびき方で鳴り出していた。空襲で焼けなかった金沢の町の屋根瓦が、水で洗ったように美しい。

彼は、もう何年も除夜の鐘など聞いていなかった気がした。戦後の東京で、親戚との同居生活が彼の一家に五年もつづいたのだったし、学生である彼自身、年の暮はいつもアルバイトと決まっていた。おそらくこの時間は眠りこけたまま、正月にのめり込んでいたのだろう。

除夜の鐘のめずらしさもさることながら、彼は、何故自分がこういう時間に窓をあけたのか、その気持の方に、ほんとうの感慨があった。

隣の石原家はひっそりとしている。いつもの夜更けとおなじように灯がともっている。あの灯のともっているところに、あの美しい人がいる。ただそれだけのことを確認するために、

深夜、ふっと窓をあけているのである。

その時、妹の令子が、階下から声をかけてきた。起きているなら降りて来ないか、というのだ。父の転職のおかげで、地方の、こうした借家ながら、ひろびろとした一軒家で年越しをすることになった家族の機嫌はよかった。案の定、彼が階段から、顔を出すか出さないかのうち、「新年おめでとう。」

と、父の良介が、めずらしいことを言った。多少名を知られた翻訳、評論家といったところで、戦後ずっと生活の安定を欠いていた良介は、金沢大学の英文学科教授におさまったことで、息子の眼から見れば、甚だ単純に得意の人間となっていた。もともと彼は、旧四高出身で、今度の転職も、地元の同期生である数人の実力者の猛運動によるものだった。彼等はその上、市の高級住宅街に家まで見つけてくれたのだ。

俊介は用意された酒の卓子に、父と対むかいあった。おそらく良介は、土地の名産のふぐやごりを喰くいつつ、古都礼讃をやって、呑み明すつもりだろう。俊介は辟易しながらも、妙に弱味のある人間のように畏おそまっていた。そしてその時、父が傍の、毛糸の羽織で着ぶくれた母を省みて、こう言わなければ、俊介は何とか、口実をつくって、席をたっていただろう。

「お母さんの病氣も大したこともなくて、まずはめでたい。まったく遠い親戚より、近くの何

とかだな。」

引越しの日、玄関で、荷解きの最中に、脳貧血で倒れたさと子が、思いのほか短時日に元氣を取戻したのは、その時、隣家から飛び出してきて、甲斐々々しく応急手当をしてくれた上に、医者まで呼んでくれた皐月さつきという娘がいたからだ、という話なのである。

どうやら、家族のあいだで、皐月さつきのことが話交わされる時の実に愉しい気分を、盗むようにして、俊介は味わっていた。いまの俊介が、家族と団欒する目的は、そんなところにしかなかった。尤もこれまでも彼は、それほど両親のあいだに疎外感はなかった。彼は生来温和な上に、妙に老人くさい分別心なども持合せていた。というのも良介は職業上子供にも分けのいいところを見せて無関心を装っていたし、母もかつて女学校の教師をつとめたこともあり、まずは良妻賢母というところだった。家族のことで腹を立てるようなことがあれば、立てた本人だけの損に終るような雰囲気が出ていた。しかしここ数日、俊介はひどく自分が焦燥し、独りになりたがっているのだった。——隣家の皐月に接近したがっているのだ。つまり十日後には東京の大学へ戻らねばならぬという限られた時間内での行動にひたすら思いあぐねているために、家族が頗る煩わしくなっているのだった。

引越しの翌朝早く、皐月が、並木家の荷解きのあとの縄屑や紙屑を掃き集めて、ひっそりと

焚火をしていたのを、俊介は例の二階の窓から見ている。小柄な躰をきびきびと動かしているわりに、顔には昨日はじめて見た時のような緊張はなくて、何ともぼんやりとした表情が焚火の火のせいか、ゆったりと愉しそうに見えた。その物忘れしたような顔が美しかった。そのうち、たしかに二階の彼に気づいたようなので、彼は会釈ぐらゐは交わすつもりで機会を窺っていた。いや、感謝の言葉が次々と浮かんでもどかしいくらいだったが、ひょいと直ぐ目の前の櫺の大樹に眼をやった時、もう彼女の姿は消えていた。

それから三時間ほど経って、皐月は小ざっぱりした銘仙の対の姿で、並木家の玄関に現われた。さと子の容態を訊ねにきたもので、取次ぎに出た令子が、昨夜の礼を言い、母がすっかり落ちついてよく睡っていることなどを伝えた。ところへ父が出てゆき、俊介も加わり、玄関で帰るという皐月を無理矢理、家内へ引き揚げた。昨日いつの間にか彼女は姿を消していて、ろくに礼を言っていなかったのである。一旦家に入ると、皐月は、遠慮のない小走りの格好で、さと子の臥ている座敷にゆき、ほんとうに熟睡しているさと子に安堵したようだった。玄関にだってかえして、

「これから買物にまいりますけど、なにかお急ぎのものがあれば買ってきましようか、うちは小人数なので、ものによってはご一緒してもらった方が助かります。」

「小人数って仰言るとご家族は？」

と良介が訊ねた。

「はい、父と二人きりでございます。」

そう言えば、昨日の騒ぎに門から出てきた気むずかしげな老人を、彼等は見ていた。

「では、あの広い家に二人きりで？」

「ほほほ、広いばかりで、たいへんなおんぼろなんです。」

言われてみればそのとおりで、一応武家邸の体面は保っているが、石原家の土堀は半ば崩れかかって居り、俊介の部屋の窓から見える限りの勝手口に至っては、掃除がゆきとどいているのが却って寒々とした感じで、出入りする皐月を見るのが、はばかりれるほどの荒廃ぶりである。この地方特有の雪吊りなどの手入れも前栽の数本の松に見受けられるだけで、広い裏庭の方は柿や杏の木畑、鬱蒼とした竹籬なのだった。しかし良介の推量では、この邸の構えは、前田藩の旧臣として、人持組三千石以上の士族の筈であった。

父が気むずかしい方なので、戦時中も戦後も、疎開の人を受けつけず、二人きりでそれは心細いこともあったが、いつもお隣りに良い方が移って来られるので助かります。と言って、皐月は帰っていった。

「あの娘さんはいったい幾つぐらいかな？」

良介が、家族のなかで一番皐月に関心を持っている風なのだ。評論家の野次馬精神を、彼は時々こんな女子供の話題に發揮して、はしゃぐのであった。

「昨日はいやに看護が板について、しっかり者に見えたが、まだ若いんだねえ。」

「でも、話しっぷりなんか、二十六、七じゃないかしら。」

と令子が口をはさむと、

「化粧のせいかな、若く見えたよ。まあ一見二十五、実は六、七、というところじゃないのか、

……こういうところで父娘ぐらしとあっては、売れ残る一方だろうね。ともあれ、典型的金沢美人だ。」

俊介は一言も言葉をはさまなかった。彼はただ皐月という女が、わが家族間でどのように評価されるかに耳を傾けていた。この土地柄としては、他国者には実に無愛想を極めるのに、彼女のようなのは例外であって、よほど人恋しい環境にあるのだろうと、良介はあとの一言を評論家風な言い廻しで言った。が、俊介はそうは思わなかった。皐月の親切は、人恋しさや、物欲しげなどというものではなく、なにか彼女自身の躰が非常に身軽くてきていて、その美しい手足のせいで、苦もなくふるまっているとしたか思えない。何の邪念もない。その証拠に用が済

めば直ぐ居なくなっている。彼はふっと（飛翔）という言葉を思い泛べたが、自分が女を恋している意識がその時はっきりと感ぜられた。

2

大晦日の前夜、俊介兄弟は、皐月から正月用の買出しに誘われて、近江町の中央市場へ出かけた。元来彼は気軽るに家事を手伝う性質で、子供の頃から病弱な母に代って、近所の使い歩きは、令子より彼の役目だった。

市場といっても、町の一区画を占めて、豊富な魚介や野菜の店が、何十軒とつづいているのだ。食料の氾濫のために起る異常な興奮が、それほど興味を抱いている筈のない俊介にも伝播した。早速買い漁ろうとすると、皐月は、新年早々「お買初め」というのがあると教え、なるべく買物を制限するように教えた。が、そう言っているうちに、兄弟の買物籠は一杯になった。注意した手前か、皐月の方は要心深いほど買い控えて、結局彼女はかまぼこと三つ葉と、だし昆布を買ったに過ぎなかった。

「うちでは正月の祝いはいしませんものですから……」

兄妹たちの思惑を外すように彼女は言い訳をした。

「失礼ですが、喪中ででもいらっしゃるんですか？」

「いいえ、そういうことではありませんが……家ではずっとそうしているんです。……でも、ちゃんとお雑煮は頂きますの、お餅は父も私も好物ですから。」

俊介のもっともな質問に、むしろ彼女は体をかわすようにそつなく答えた。それから、和菓子のお餅で菓子を買ったが、皐月はそこで擦れちがいに入ってきた桃割れの若い娘と旧知らしく挨拶をした。一足先に歩き出した俊介たちはその娘が皐月のことを「先生」と呼んでいるのを耳にした。皐月は間もなく二人に追いつくと、時折自分はああいう人たちに、茶の湯を教えているのだ、と言った。

「ところで、お兄さんは、金沢の感じ、いかがですか？ お氣に入りましたか？」

話のついで風に、その時、彼女はこう訊いたが、いつか彼は彼女にお兄さんと呼ばれているのだった。妹の令子の口うつしで、親しさは充分感ぜられたが、彼にしてみれば、ぐんと年下の坊やの扱いを受けているようで、不満であった。金沢の感想を訊ねられて、彼は、ええ、よろしいですね、と生返事をしてしまったが、良介のように、彼はこの町を手放しで好きにはなれなかった。